

ヒポクラテスは、プラタナスの樹の下で弟子たちに医学を説いたといわれる

20世紀は大きなイデオロギ
の時代だった。実体的ない、
主義と名がつく動きに振り回
された時代ではなかったのか
「global thinking, local ac-
tion」である。「国際人」がそ
の象徴だった。

世界の人たちが日本に関心
を抱く三つの項目がある。「平
均寿命が世界一」「戦後の奇跡
的な経済復興」、そして「幕末
の非植民地化」である。日本
人ならこの3項目に答えを用
意しなければならぬ。この
3項目を達成した日本人は
「国際人」だったのだろうか。
むしろ、自分の職業、自分の
生活、そして自分の家族を大
切にした人たちだった。

昭和44年に小田 実の『何
でも見てやろう』を懐に抱い
てアジアへ行き、10カ月間ヒ
ツピー、ほろほろ旅をした。
昭和46年にミャンマーとの国
境地帯にあるタイの少数民族
の開拓農場に、医学生主体の
第一次岡山大学クワイ河医学
踏査隊を派遣して寄生虫や日
本脳炎の調査をした。以来40
年になる。昭和59年に設立し

たAMDAは、現在では国連
NGOとして29カ国に支部を
持ち、今までに52カ国、12
0件以上の紛争地や災害被災
地に多国籍医療チームを派遣
してきた。海外にも多くの信
頼できる友を得た。しかし、
誰一人として「国際人」はい
なかった。家族を、故郷を大
切にしている人たちだけだっ
た。「local thinking, global
action」が事実だった。

「自分の職業、自分の生活、

市民参加型 人道支援外交



菅波 茂

◎すがなみ しげる

特定非営利活動法人アムダ(the
association of medical doctors
of Asia : AMDA) 理事長

1972年岡山大卒。77年同大院博士
課程修了(公衆衛生学)。同大第一内
科等を経て81年開業。84年AMDA設
立。2007年AMDAが国連経済社会
理事会より総合協議資格の認証を受
ける(日本のNPO法人で初)。第37回
吉川英治文化賞受賞。日本医師会国
際保健検討委員会委員。

そして自分の家族を大切にし
ている人」を共通項に、紛争
や災害時に助けられた側の市
民が次回には助ける側になる
相互扶助の下に信頼構築をし
て世界平和に寄与する。これ
が市民参加型人道支援外交で
ある。ただし、世界の80%が
つながりのない他人にとって
それは絶縁共同体社会である。
その絶縁共同体社会に他人が
迎え入れられる数少ない機会

が、紛争や災害により、命の
存亡の危機に瀕した時、「ま
さかの時の友が真の友」とな
る時である。世界の市民間の
信頼構築の入り口の開門であ
る。

第二次世界大戦で日本は国
内外に膨大な数の死者を出し
た。「世界から孤立しない」こ
とが日本の外交の基本である。
外交には3種類ある。国家だ
けができる外交。国家と民間
が共同でできる外交。民間の
みができる外交。国家だけが
できる外交の限界が21世紀の
課題である。BBCの調査に
よれば、日本は世界で最も嫌
われない国である。最も嫌
好かれていない国ではない。少
しでも好かれる国になる。親
日を増やす。これが人道支援
外交の目的の一つである。

21世紀は政治・経済的に大
混乱の時代である。国家やN
GOが人道支援を専門とする
時代から、市民が人道支援に
直接参加する時代が来た。な
ぜなら、信頼に基づく人間関
係がすべての基本となる時代
になるから。